

児童福祉施設における学習支援Ⅰ

—母子生活支援施設退所児を対象とした無料塾の実践—

田尻 さやか

母子生活支援施設の退所児を対象とした「無料塾」に通う子どもは、様々な場面での危機を体験して、現在に至っている。その子どもたちの課題として①学習環境の確保②発達の課題への援助③適切な人間関係の構築が挙げられる。

「無料塾」において、多様な人間関係を築く能力を養うことのできる可能性が示唆されたが、基盤には「安心できる居場所」であると子どもたちに認められているからこそである。それは、単に学習の機会を得るだけにとどまらず、これまで体験した危機を乗り越え、そして現在・未来にも困難に会う人生の中で、「しなやかに生きる」「心が折れても立ち直る力」を学んでいる。それを得るまでには、継続した粘り強い大人のかかわりや安心できる仲間との関係に支えられ、その経験が子どもたちの「居場所」となっていると考えられる。その「居場所」は困難にぶつかったときにも立ち直ることを支える関係モデルの一つとなっていると考えられる。

キーワード：母子生活支援施設 アフターケア 無料塾 学習支援 居場所づくり

1. はじめに

1-1 母子生活支援施設の現状

児童福祉施設の1つである母子生活支援施設は、児童福祉法第38条に基づき設置されており、その目的は「配偶者のない女子又はこれに準ずる事情にある女子およびそのものの監護すべき児童を入所させて保護し、これらの者の自立のためにその生活を支援する」¹⁾ ことである。

母子生活支援施設は東京都に34施設あり、平成28年4月現在、552世帯の親子が利用している。入所期間の平均は1年8か月、入所児童の年齢層は0歳から6歳までの就学前の幼児は約45%、小学生約35%、中高生が約20%となっている。

入所理由は住宅困窮・経済的困窮、DV、生活環境不良、母親の心身の不安定や障がい・疾病などが挙げられる。中でも深刻になっているDV被害世帯数は228世帯41%となっており、全体の

半数に迫る勢いである。ただ、この数字は統計上明らかになっている数字であり、暴力から身を守り、安心した生活を送るための援助を行うなどの配慮が必要であるDVという問題の性質上、統計上には見えない被害世帯もあり、施設職員の話によると、入所世帯の7割～8割は、DVの被害世帯であるという施設もみられる。また、外国籍の母親は75世帯であり、全体の13%を占めている。²⁾

基本的には、母親に対する相談援助・生活指導・就労支援、人間関係調整、健康に関する援助などを、児童に対しては保育、学習指導、生活指導、行事などを通して支援を行う施設である。子どもの発達支援や自立を目指すことと同時に母親の経済的自立や精神の安定、人間関係の調整を目指し、約二年間の入所期間で様々な方面から支援が行われる。

また、施設の機能として、退所した者への相談、その他の援助を行うことも求められる。近年注目されているように、母子家庭の置かれている状況

は不安定であり、就労や金銭に関すること、健康の課題など、退所後も母子だけでは解決することが難しいことが多くある。中でも、子どもの進学・就労に関しては大きな課題となっている。子どもにとって受験などへの学習支援が必要なだけでなく、生活が不安定なゆえに生活支援が中心になり学習習慣をつけることが課題となるケース、経済的に就学継続が困難になるケースがある。将来の就労に向けた長期的な視点を持ち、職業選択の可能性を広げるための支援が必要なケースが多くある。

1-2 児童福祉施設における学習支援と課題

2008年ごろから子どもの貧困、母子家庭に対する貧困問題が注目され、2014年1月には子どもの貧困対策の推進に関する法律が施行された。その目的は「子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図るため、子どもの貧困対策に関し、基本理念を定め、国等の責務を明らかにし、及び子どもの貧困対策の基本となる事項を定めることにより、子どもの貧困対策を総合的に推進すること」³⁾であり、「子ども食堂」「無料塾」などの取り組みが全国的に増え、報道などで目にすることも多くなっている。

また、児童養護施設など児童福祉施設では塾や大学生による学習支援が整備され、いくつかの研究でその効果や現状が報告されている。

高校進学率は全体で約98%、施設入所児は約94%となっており、ここ数年の取り組みの成果がでていると考えられるが、まだ内容の検討や実態についてはばらつきがあり、中にはより専門的な視点をもって支援していくことが必要なケースもあることから、より充実した学習支援の在り方の検討が必要と考えられる。

母子生活支援施設の入所期間においても学習支援は子どもとかわるうえでの大切な一つの間となっているが、在年数が平均2年であることや幼児期に入所している児童が約半数であることから、退所後に学齢期を迎え、学習支援が必要になるケースが多くある。

母子生活支援施設の退所後のアフターケアとして、相談援助、施設が主催する行事への参加、保育・学童保育などの支援が挙げられる。東京都の統計では、アフターケアとして相談援助や行事参加などは30施設以上で取り組まれているが、学習支援を行っている施設は34施設中19施設である。そして、その実際はあまり明らかにされていない。学習支援の形として、定期的に個別指導を行う形態や施設で行っている学童保育の中で行う形態などが考えられるが、高校進学までを視野に入れて継続的な支援とするには課題が多くある。

近年「子ども食堂」「無料塾」の取り組みが注目されはじめてきているが、母子生活支援施設のアフターケアの1つの形として「無料塾」を開く例が少しずつ出てきている。児童福祉施設として支援できる特徴は入所時からの連続した支援が可能になること、児童だけでなく学習支援を介した家族支援ができること、様々な職種がかかわることなどがあると考えられる。そのスキルが明らかにされることで、児童福祉施設に入所した子どもだけでなく、貧困問題で進学・学習支援が必要な子どもたちが「無料塾」で質的に豊かな支援を受けられる可能性があると考えられる。

2. 研究の目的

母子生活支援施設におけるアフターケアの1つの形としての「無料塾」の実際を明らかにすることを通し、質的に豊かな支援とは何かについて考察する。そして、「無料塾」の役割、意義と今後の課題について明らかにする。

3. 研究の方法

母子生活支援施設 A 施設において開かれている「無料塾」の実践を取り上げる。A 施設の「無料塾」に週1回、20××年5月～20××年+1年3月の1年10か月の間、直接子どもの学習支援を行う講師の立場で参加した。その参与観察記録から「無料塾」の特徴が表れているエピソードを取り上げ、その意義について考察する。

また、塾長からの非構造化インタビューから、本研究が参与観察する以前の子どもの様子や情

報について、本研究に必要な子どもの背景として抽出し、掲載している。

A 施設の「無料塾」の概要は以下の通りである。

< 対象 >

母子生活支援施設 A 施設の退所後、小学4年生～高校生になった児童

< 開塾日 >

・週3日（小学生クラス：週2日、中・高校生クラス：週2日、来塾日はそれぞれの都合に合わせて選択し1人につき週1～2日来塾）

< 時間 >

小学生クラス 週2回	16:30～17:10	学習
	17:10～17:30	休憩、軽食 (おにぎり提供)
	17:30～18:00	学習
中学生クラス	19:00～19:50	学習
	19:50～20:10	休憩、軽食 (おにぎり提供)
	20:10～21:00	学習

< 環境 >

多目的ホールとして設置された部屋で会議用テーブルを6台～8台並べ、テーブル1台につき1～2人座る。ホワイトボードが2台用意されている。

< 人数 >

小学生10人、中学生15人が登録。

1回、1クラスにつき2人～10人の児童が参加。専属の職員（母子生活支援施設児童指導員兼任塾長）1名、社会人講師1名、大学生講師0～2人が机間巡視しながら、個別の課題に合わせてかわる。

4. 倫理的配慮

本研究の対象となるA施設の「無料塾」の実践の内容については、研究の内容にかかわらない範囲で個人が特定できない形に加筆・修正を行っている。

また、A施設の施設長および「無料塾」塾長に研究の内容、倫理に関する配慮に関して説明、報告を行い、研究およびその結果の公表について許可を得ている。

母子生活支援施設倫理綱領及び日本保育学会倫

理綱領を遵守し、本研究を行っている。

5. 結果と考察

5-1 「無料塾」に通う子どもたちの課題

A施設の「無料塾」に通う子どもたちの姿から以下の3つの課題を挙げる。

①学習環境の確保

退所後、自立して生活しているとはいっても、兄弟が多い家庭や経済的に不安定な家庭も様々にある。また、家族関係の変化（親の再婚・妊娠、母の入院）などから生活の不安定さが顕著になるケースもある。入所していた時期にもよるが、特に幼少期に入所していた場合、学習習慣がついていない場合も多い。静かに勉強ができる部屋や机が用意されている家ばかりではないのが現状であり、安心して学習する環境の確保が一つの課題となる。

②発達的な課題への援助

環境的な要因と発達的な要因が重なり合い、行動の落ち着かなさ、安定した生活リズムの獲得の難しさ、生活体験の少なさ、言葉の表現の難しさ、感情のコントロールの難しさなどがみられ、それぞれの課題を適切に発見し、個に即したかわりを通して、学習支援の中でバランスの取れた発達支援が求められている。

③適切な人間関係の構築

A施設の塾に通う子どもたちの人間関係の特徴として感情表出の苦しさ、（親が外国にルーツを持つ場合）言葉の表現の乏しさ、（いじめなどで）安心していることの困難さや自信のなさを持っていることが多くみられる。

また、逆に思ったことを素直に表現（例えば相手が用意したものに対して好きではないとはっきりと言って怒らせる）しすぎることもあり、いわゆる空気が読めないといわれてしまうような姿もある。

さらには、「もの」を介してであれば友達になれるが、情緒的なつながりを感じにくく、相手の気持ちを捉えにくいことから、「もの」の貸し借りでトラブルになる場合もある。

家庭崩壊を経験し、居所を転々としなければならなかったこれまでの育ちの中で、安定した人間

関係を構築する体験がなかなかできていない場合が多い。

子どもたちは、とても素直で個性豊かであり、誰一人として同じ子どもはいない。これまでの育ちの中で困難がそれぞれあり、それを乗り越えて現在に至っている。母子生活入所時には問題と捉えられていなかったことも、発達に応じて、または環境の変化によって問題は刻々と変化している。

上記の課題についても、1人につき1つの問題だけでなく、問題・課題は重なり合い、複合的な問題となっているのが現状である。かかわる職員は母子生活支援施設での支援だけでなく、地域の民生委員や学校とも連携しながら問題を適切に見立て、かかわっていく姿勢が必要となっている。

5-2 無料塾の子どもたちの人間関係

エピソードに登場する人物名はすべて仮名であり、子どもはひらがなの名の表記、講師は漢字の性の表記となっている。

エピソード1:「学習環境」と「居場所」としての無料塾-小学生4年生 たろう(仮名)

①塾長のインタビューから得られたたろうの背景

4人兄弟の末っ子で、上の兄弟3人中2人も中高生クラスに通ってきている。

②塾におけるたろうの様子

遅刻が続き、毎回そのたびに塾長が丁寧に話をして指導する。「学校の居残りがあった」「忘れ物をした」「曜日を間違えた」など本当の理由をいうことも、うそと思われるような言い訳をすることもある。塾に継続してくること、時間通りに来ることが第1の目標となり、塾に来るまでが課題となる。

来塾しても、学習時間は離席が目立ち、友だちに必要以上に大きな声で話しかけるなど落ち着きのなさが目立つが、大人の1対1のかかわりを期待していると思えるような発言「ねえ、(講師の名前)〇〇さん見て!」「(特別な)プリントちょうだい。」が多くあり、たろうのためにプリントの問題をホワイトボードに書いて一緒に解くな

ど、「(大人が)特別にかかわりを持っている」と伝わると、落ち着いて勉強に取り組む時間が長くなってくる。

たろうの一番の楽しみは休憩時間の「おにぎり」である。塾長が毎回各クラスに心を込めて1升、約80個の小さめのおにぎりをにぎり、それはA施設の塾の名物となっている。休憩時間には、友だちとクイズや伝言ゲーム、おしゃべりをしながら食べる「おにぎり」は格別である。人気のツナマヨネーズおにぎりが最後の1つになると、むきになって確保しようとする一面も見せるが、じゃんけんなどをして友達と分け合うこと、悔しい気持ちやうれしい気持ちを味わうこともできてきている。

③エピソードの考察

小学生4年生が決まった日時に学校以外で行う学習習慣をつくっていくことは、困難である。最初は「遊びたい」「めんどくさい」「つかれた」など動機を作りやすく、これまでは大人に見てもらえている実感を得られにくい環境にあったことも重なって、はじめは塾に通うことを定着させていくことが課題となる。しかし、A:仲間がいること、丁寧にかかわる講師たちがいる心地よい人間関係への期待B:入所中に塾の存在を知り、入所中には入れない「行ってみたい」憧れの場所となっていることC:「おにぎり」休憩に象徴されるような生活に近い、リラックスした雰囲気体験できることなどが塾に通う動機になっていく。

塾に通い始める時期が早ければ早いほど、素直に塾に来る喜びや仲間との楽しい時間のうれしさを素直に表現し、塾がひとつの「居場所」の機能になっていることがうかがえる。

基本的な学習内容は、それぞれの学校の宿題を塾の時間ですることが多く、個のペースに合わせてかかわっていくことが大切になってくる。エピソードの中にもあるように、音読やひと手間かけた問題の出し方でかかわりの実感を得て、達成感や自信を得て、次へ向かう意欲につながり、講師との関係ができることが多くある。子どもと共にかかわりの実感をつくる工夫が必要になってくる。

エピソード2：仲間の支えが課題（不登校）解決へとつながる－中学3年生 みちる（仮名）

①塾長のインタビューから得られたみちるの背景

みちるは育ちの中で外国にルーツをもつ親に育てられたことを理由にいじめをうけた経験をもつ。学習に対して一生懸命取り組んでもなかなか定着せず、自信をもつことができずにいる。A施設の塾に通い始めた中学1年生のころ、みちるは小学校から中学校の環境の変化も大きく、いじめの問題・学習への自信のなさのどちらからも中学校に通いにくくなっており、30日以上長期欠席が続いていた。

みちるにとってA施設の塾には安心して通える雰囲気があり、休まず通っていた。そんな中、同じクラスのなつこも同じ塾に通っていることがわかり、最初は話しかけられずにいたが、なつこが構えることなくみちるに話しかけ、塾の中で意気投合する姿が多くなってきた。ある日、気軽になつこがみちるに「一緒に学校行かない？」と声をかけるとみちるは下を向いてはいるものの、はにかみながら「うん、一緒なら」と返事をし、行きつ戻りつの時期はあったものの、30日にもなる長期欠席になることはなくなった。

②塾におけるみちるの様子

中学校3年生になったみちるは、毎日学校に通い、部活動や学校行事にも熱心に取り組むほどの変化を遂げていた。今でもみちるとなつこは塾でも学校でも同じクラスである。ある日の「おにぎり」休憩の時に、最近入塾してきたこうすけが不登校になっていることを気配で感じ「中1の時不登校だった！私の黒歴史」となつこと笑いながら語った。あまりの明るさに初めはびっくりしていたこうすけ。言葉にはしないが、静かに2人のやりとりをリラックスして眺めながら「おにぎり」を食べている。

③エピソードの考察

中学生の学習支援もただ学習の時間をつくり、それを見守るだけではなく居場所づくりの工夫が大切である。エピソードの中にでてくるみちるは、母が外国にルーツをもつため、見た目でも、持ち

物でも違いが目立ち、学校集団でいじめられる経験をもつ。その経験から初対面の人や慣れない場面でも固まってしまい、挨拶すらできなくなってしまふ適切な人間関係の構築の困難さの問題、仲間から肌の色をひやかされるのが苦痛である、漢字がとて苦手と感じ、学習意欲をなくしていく、先生から皆の前に立たされたことが恐怖となったなどから引き起こされた不登校の問題など複雑な課題を抱えている。しかし、塾に通ってくるときには、その課題を目立たせるのではなく、塾に自然に通ってこられるように、安心していられる場所がまず整えられることが重要である。さらに、子どもと子どもの関係でも、子どもと大人との関係もまず、子どもから話をしてみたい、安心して自然におしゃべりできる相手であるという信頼関係が構築できるよう、塾の人間関係の状況を柔軟にとらえ、みちるとなつこの関係をとらえ、あたたかく見守り、その関係を心地よく感じ、2人のつながりを支えていく、さらには他の塾の仲間とも関係が広がり、適切な距離をもって子どもたちが自ら解決できるような援助をしていくことが大切になっている。

集団のなかでは扱いにくい問題も多くあるが、職員や講師が複数でかかわっていること、その情報を丁寧に共有（記録ファイルや口頭でのふりかえり）していることから、時機をみて、個別に対応していくことも可能である。

エピソードの最後に登場したこうすけのように、中学3年生で高校受験を目前に控えてはいても、言葉が少なく覇気がない、何を考えているのかわからないと思われてしまうような児もいるが、大人が熱心にかかわるだけでなく、同じ時期でなくても同じA施設で育った共通の基盤を感じ、共に塾に通っている仲間とのやりとりがこうすけの表現のきっかけになることもよくある。

エピソード3：新しい仲間との出会いと大学生講師との別れ－とおる（小4）・はるこ（小5）・こうすけ（中3）・みちる（中3）・なつこ（中3）・けいこ（中2）・藤井さん（大学生講師）すべて仮名

①塾長のインタビューから得た子どもたちの様子
A施設の塾に入るときには塾長と面談する、見

学する、体験入塾をするなどのプロセスを経て入塾の運びとなる。

②塾における子どもたちの人間関係の様子

夏の終わりのこうすけの入塾の時には、塾長の「見学に来る友だちがいるけれど、いつも通りに勉強してください」といわれても、小学生クラスでは塾長がこうすけの案内をしているすきに勉強の手を止め、ホワイトボードに5人の子どもたちが集まって「Welcome ようこそ！塾へ」と歓迎の気持ちを表し、「名前はなにかな？いつからくるのかな？」と楽しみにしている様子である。

年が明け、春になると、3年間大学生講師としてかかわっていた藤井さんが大学卒業、就職に伴い、A施設の塾の講師を卒業する（辞める）ことがだんだんとわかってくる。3月のある日、高校受験が終わってほっとしたみちるとなつこは、中学校でも藤井さんとの別れが来週であることを確認し、手紙を用意する相談をしている。

そして、別れの日。小学生のクラスでは学習時間の終了の5分前になると、藤井さんのあいさつがはじまり、「そんない」「サインちょうだい」「また来るよね」と子どもたちは別れを惜んでいる。そこから約30分間藤井さんのサイン会が始まり、まるでアイドルとの別れのように身の回りのペンケースやファイルに藤井さんの心のこもったサインとメッセージをもらう。サイン会が続いているその中で、とおるが卒業しない社会人講師にひそひそ声で「みんなで並んで『ありがとう』って言おうよ」とサプライズの作戦を提案する。講師は、「自分たちでやってごらん」ととおるに助言し、とおるは（藤井さんにはわかってしまっているが、サプライズになるように）7人の仲間たちの耳元に作戦を伝えに回る。また、はるこは部屋の隅で小さなメモ帳にありがとうのメッセージをカラーペンで大急ぎで書いている。それをまねする友だちもでてくる。一通りサイン会が終わったところで、玄関に並び、とおるが合図をして「お世話になりました、ありがとう」と声を合わせて7人の子どもたちが頭を下げ、気持ちを表した。それを聞いた藤井さんは涙を流しながら、一人ひとりと握手やハグをして、最後の別れをする。

中学生のクラスでは、すでに今日でお別れであることを理解している、みちるとなつこがいつものように平静を装って過ごしている。終了5分前に藤井さんの挨拶が始まり、塾長から代表してなつこが挨拶をすることを指名されると、「絶対に泣いちゃうから手紙を書いてきました。（涙が）決壊しちゃうから読みません」とうつぶき、感謝を表す。再び中学生クラスもサイン会が始まり、その合間に手紙を用意していなかったけいこも手紙を書いている。

③エピソードの考察

A施設の塾に通う子どもたちは、初対面の大人の人にはなしかけることが難しい、慣れてくると「あっちいけ」「わかっているのに）名前知らないからだれだっけ？」「じろじろ見ないでください」などマイナスととられるかかわりを繰り返し、相手の態度を見ている、またはずっととなりになつていてほしいと一人の大人を独占するなど適切な人間関係の構築に課題がある。それは、人間関係の敏感さや距離の取り方に難しさがあつてのことである。これまでの育ちの中で特定の大人にじっくりと丁寧に継続してかかわってもらった経験や、安定した人間関係を構築することができにくく、DV被害などで急に居所を変え、隠れて暮らすことを強いられるなど、しっかりと出会いと別れを体験することは難しい状況に置かれていることが多くみられる。エピソード3にあるように子どもたちが自ら別れの節目を感じられるようなかわりを体験している。それは、命令されたわけでも、作りこまれた場面でもなく、継続した人間関係の中で培った力を発揮した出来事であった。

学習の場を確保する意味の塾のあり方だけでなく、普段は大袈裟なやり取りがなくても、同じ空間の中で勉強する2時間を毎週共有していること、いつも変わらず出会える関係を継続して味わえることが家族崩壊などを経験した子どもたちにとって、適切な人間関係の体験・信頼関係構築のプロセスの1つとなっているように思われる。それは個別指導では得られない、集団ならではのダイナミックな人間関係の中で味わえる学びである。

6. まとめ

6-1 家族支援の場

母子生活支援施設で過ごしたことがある、アフターケアを必要とする子どもを対象とした「無料塾」の取り組みにおいて、目の前の子どもの姿、課題をしっかりと捉えることは基本的な重要事項である。しかし、目の前の子どもを捉えながらも、長期的な視点で、子どもの将来の職業選択の可能性を広げるための学習支援の計画をすること、さらには子どもとつながる家族や地域（学校）とのつながりを考えて支援する視点が重要になってくる。A施設の「無料塾」では、欠席が続くなど心配事があればすぐに母親に電話を入れる、年に1度3者面談を実施するなど、子どもの学習を介して家族とつながっていることを大切にしている。

そこには母子生活支援施設の児童指導員と兼務する塾長の果たす役割が大きい。また、入所時の姿を知っている職員も、階や玄関、部屋が違っていつも見える場所にいなくても、同じ建物内にいて、すぐに対応できるようになっていること、塾長が定期的に職員会議で通塾している子どもや家族の姿を報告し、施設全体で情報を共有していること、さらには施設全体で退所前の「無料塾」通塾候補生を早い段階からみきわめていることなど、児童福祉施設の1室を使って開いている「無料塾」ならではの強みがある。また、民生委員や市区町村の福祉課など地域との連携をとっていることも福祉施設で開く「無料塾」の特徴である。

6-2 人間関係の大切さを学ぶ場所

「無料塾」に通塾する子どもたちは、様々な場面での危機を体験して、現在に至っている。それが表面化している場合も、これから表面化する場合もあるが、将来のよりよく生きるための力を培う時期に豊かな人間関係を体験し、身近な人間（仲間）と信頼関係を築き、安心して学習に取り組む環境を整えていくことが大切になってくる。それを支えるのが「無料塾」の役割の一つと考える。

「勉強する場」の性質と施設退所後の「居場所」としてのバランスが難しいところではあるが、「無料塾」という形で学習支援をすると、子ども対大人（職員や大学生講師など）、子どもと子どもの

様々な人間関係が交差し、ただ勉強する場所ではない人間関係のプロセスを味わえる場となる可能性が明らかになった。これまで家族崩壊など危機場面を体験した子どもにとって、継続して安心して定期的に通う場所ができることが、家庭生活や学校生活の安定にもつながっているケースも散見される。

集団で学習する場であることは、同じ空間で仲間の学習する姿が励みになる、ちょっとした会話で気分転換になる、様々な人と安心した雰囲気の中で出会える良さがある。しかし、デメリットとして、個別的にじっくりとかわる時間を持ちにくいところから信頼関係を感じにくい、子どもの変化・かわりのチャンスを見逃す場合もあることがあり、かわる大人は敏感にアンテナをはって関わること、全体を見ながら個別に丁寧にかかわること、大人同士が互いに信頼できるチームであることなど専門性が求められる。

6-3 安心できる居場所

「無料塾」において、多様な人間関係を築く能力を養うことのできる可能性が示唆されたが、その基盤には「安心できる居場所」であると子どもたちに認められているからこそである。

『初めて会った仲間でも、育った場所である「実家」のような場所に継続して通うことは何よりも安心』を感じるきっかけであると子どもたちの会話から聞いたことがある。しかし、それは通塾するきっかけとはなるが、毎回継続して通う中で①いつも同じ時間に、同じ仲間・大人と出会えること②「おにぎり」を食べながらおしゃべりし、休憩すること③「無料塾」にいる人同士では理不尽に威張ったり、怒ったりする関係がないなど「居場所」としての機能が最大限発揮できるように、細かい配慮がなされている。

子どもたちにとって、「無料塾」で学ぶことは、学習の機会を得るだけにとどまらず、これまで体験した危機を乗り越え、そして現在・未来にも困難に出会う人生の中で、「しなやかに生きる」「心が折れても立ち直る力」を学んでいる。それは、1回限りで身につく力ではなく、普段はただ勉強し、おにぎりを食べているだけに見えるごく自然

な時間・空間に繰り返し体験することで身につく力である。それを得るまでには、継続した粘り強い大人のかかわりや安心できる仲間との関係に支えられ、豊かな経験となり、その経験が子どもたちにとっての「居場所」となっていると考えられる。その「居場所」は困難にぶつかったときにも立ち直ることを支える関係モデルの一つとなっていると考えられる。

6-4 今後の課題

今後、研究を継続し、さらに丁寧な人間関係の変化・発展のプロセスを分析し、「無料塾」における関係モデルの構築のプロセスを明らかにしていきたい。

また、「無料塾」の実践を続けるにあたり、人（特に熱心で子どもに自然に向き合うことのできる大学生）の確保、運営母体の違いで「無料塾」の役割や機能は変わるのかを明確にすること、さらには地域に暮らす貧困家庭（母子家庭など）に暮らす子どもたちにも「無料塾」に通う枠組み作りなど課題は多く残っている。

7. 謝辞

A 施設において共に実践をしている施設長・塾長はじめ諸先生方にはたくさんの学びを得て、本稿を書くまでに至った。このような機会を与えて

いただき、感謝いたします。また無料塾に通っている、子どもたちにも謝意を表します。

8. 引用文献

- 1) 『児童福祉法』 厚生労働省 2011
- 2) 『母子福祉部会紀要』 社会福祉法人東京都社会福祉協議会 母子福祉部会 No.10 (平成 28 年度) 2017
- 3) 『子どもの貧困対策の推進に関する法律』 総務省 2014

9. 参考文献

- 1) 堀場純矢「母子生活支援施設における家族支援の実態－母子指導員への聞き取り調査から－」東海女子短期大学紀要 2006
- 2) 下村美刈 日下部美衣「母子生活支援施設児童への学習支援について」愛知教育大学教育実践総合センター紀要第 11 号 2008
- 3) 大塚類「特別な教育的ニーズのある子どもへの学習支援について－児童養護施設の学習ボランティアの語りを通して－」千葉大学教育学部研究紀要第 59 号 2011
- 4) 山本佳代子「児童養護施設における学習支援に関する一考察」山口県立大学社会福祉学部紀要第 13 号 2007
- 5) 鷹咲子『子どもの貧困と教育機会の不平等 就学援助・学校給食・母子家庭をめぐって』明石書店 2013
(受付 2018.3.28 受理 2018.7.6)